（城西人文研究第14号）

キーツの『秋に寄せて』(二)

第２連の情景

永井豊実

キーツの *To Autumn* の第２連は，秋の４つの情景をそれぞれ女性の姿として捕えたものである。秋が女性の姿をとって秋の貯えなるものの内に現われるのである。この一種の personification 的なものの背景を十分把握しないと，この秋の風景を理解することは難かしい。秋の女性の姿の中に秋の風景が浮かび出る二重写しに，ぴったりと映像が一致しないと，この詩の味いは無くなってしまうようだ。幾つかの注釈には多少の違いがあるので，自らの映像を作りあげるのには十分な情景把握が必要である。先に拙論「秋の映像—キーツの『秋に寄せて』[1]」(一) においてひと通り概括してみた。しかし，まだ舌足らずな面があるので，第II連について，(幾らか重なる個所が出てくるが)，ここでもう一度考察してみたいと思う。

II

Who hath not seen thee oft amid thy store?
  Sometimes whoever seeks abroad may find
Thee sitting careless on a granary floor,
  Thy hair soft-lifted by the winnowing wind;
Or on a half-reap'd furrow sound asleep,
  Drows'd with the fume of poppies, while thy hook
    Spares the next swath and all its twined flowers:
And sometimes like a gleaner thou dost keep
  Steady thy laden head across a brook;
  Or by a cyder-press, with patient look,
    Thou watchest the last oozings hours by hours.

お前を見ぬ者誰いよう　しばしばお前の穀倉に。
　時々戸外に求めて行けば　お前の姿を見つけ出す
穀物倉の床の上　のんびり坐っているお前,
　お前の髪を柔らかに　籾殻吹き分く風にのせ。
或いは半ば刈られた畝の上　ぐっすり眠っているお前,
　けしの香りにまどろみて，お前の鎌が
　　刈り残す蔓の花々絡まった　次の畝刈る一時を。
そして時々落穂拾いの人ごとく　お前は
　荷を載す頭をばしっかり保たせ小川を渡る。
　或いはりんご絞りの臼のそば，辛抱強い面持で,
　　幾時間ともなく滲み出る最後の最後の雫をば，じっとお前は見つめている。

この第2連の書き出しは，秋は秋の貯えの内に見い出せる，と言って戸外に秋を捜しに行くところから始まる。

Who hath not seen thee oft amid thy store?
　Sometimes whoever seeks abroad may find. (ll. 1-2)

「誰がお前の貯えの内にしばしばお前を見なかったであろうか。時々戸外に捜しに行く者は，誰でも見つけることができる。」と言っている。この thy store（お前の貯え）とは一体何であろうか，ということになる。そして次々に現われる風景によって，それが穀物倉の中に堆く積まれた穀物であり，麦畑の麦穂であり，籠に拾い集められた落穂であり，押し潰されたりんごジュースであることが分る。Helen Vendler 女史はこの連では the grain harvest と the fruit harvest との二つから成っているとし，象徴的にパンとブドウ酒（りんご酒ではあるが）を暗示していると言っている。そして hath not seen は no other reapers in the field, no threshers in the barn（麦畑には他の麦刈人も居ないし，納屋には脱穀する人も居ない）として，麦刈人や脱穀する人は想像するが，場面には登場しないと言っている[2)]。更にはりんご酒を絞る人も場面の奥に見るだけで，ここでは登場しないので，二重にフィルムを重ねなければならない。Whoever seeks abroad の abroad は，to the outbuildings, the

granary, the threshing floor, the building housing the cider press, and to the cornfields full of wheat and popies[3]〈外の建物へ，穀物倉，脱穀場，りんご酒絞り機を置く家，そして小麦やケシの花の咲麦畑へ〉行くことになるのである。幾つかの語（句）を再度確認しながら情景を描き出していくことにする。

第1情景は，

Thee sitting careless on a granary floor,

Thy hair soft-lifted by the winnowing wind; (ll. 3-4)

である。穀物倉（a granary floor）はどの様なものなのだろうか。granaryは普通農家の屋敷にある納屋 barn を想像してよいのだが，a storehouse for grain after it is threshed (OED) と出ているように，thresh と grain を連想することになる。Helen Vendler 女史はこの第II連で，We see in this poem a thresher who does not thresh, a reaper who does not reap, a gleaner who does not glean, a cider-maker who does not turn her press.[4]（脱穀をしない脱穀をする人や，刈り取りをしない麦刈人や，落穂拾いをしない落穂拾いの人や，りんご絞り機を回さないりんご酒造りの人をこの詩の中で見る）と言っている。このことは秋との係わりで大事なことで，この第2情景では thresher〈脱穀をする人〉が脱穀をし，次に籾殻を吹き分けている光景が想像できるのである。そしてひと仕事終って堆く盛られた穀物が床に置かれており，thee が careless に坐っているのである。そして thee は thresher に見られている。Careless は注によると，either free of care (because the harvest is safely gathered), or physically relaxed[5] とか，care-free, light-heartedly[6] となっていて，収穫も無事終り，肉体的にもやれやれとほっとしている状態で，心配事もなく，のんびりと，無造作に，という状態と言えるし，穀物の方は，無造作に置かれている状態にもとれるのである。Ian Jack（イアン・ジャック）氏は Giulio Romano の絵 'Sali di Psiche' (Psyche asleep among the Grain)「穀物の中で眠るサイキ」を挙げている。イタリアの農業の神 Ceres を暗示しているとし，膝を立てて頬杖をついて，坐ってうっとりとしている女神が描かれている。そして

the winnowing wind の〔wi〕の音の繰り返しによりサーと吹き渡る秋風に髪の毛を柔かに靡かせているのである。Winnowing によっても籾殻を吹き分ける人の姿が浮んでくる。農婦が唐箕で吹く風か箕であおる風か[7]，それとも外で吹く風に吹かせて選り分けられて散っていく籾殻が，まるで女性の髪が靡いているように見えるというのである。この脱穀の情景において，Helen Vendler 女史は何故最初に脱穀が出てくるのか，普通の順序としては，最初に刈り入れがあり，次に落穂拾いがあり，最後に脱穀があるのに，ここでは最初に脱穀があり，次に刈り入れがあり，最後に落穂拾いとなっている。それは恐らく，動きのない刈り入れ風景を最初に出せないのと，落穂拾いの人が家路につくことによって哀感を出すことができるために最後に持ってきたのではないかと言う[8]。順序としてはおかしいのだが，点景風景として，農家の納屋では脱穀があり，また麦畑では刈り入れがあるという風に，農家での平行した仕事の順序としてとってもよいように思われる。そして sometimes が〈時には〉という感じをそこに出していると思われる。第1情景を纏めるならば，農婦が脱穀も終って籾殻を吹き分けている。穀物倉には既に穀物も堆く盛られて置かれている。お前も籾殻を吹き分ける風に髪を靡かせながら，農婦がほっとして穀物倉に坐っているように，穀物倉の床にのんびりと坐っている，として見られよう。

第2情景にいくと，

Or on a half-reap'd furrow sound asleep,
Drows'd with the fume of poppies, while thy hook
Spares the next swath and all its twined flowers: (ll. 5–7)

となっていて，3行目の Thee sitting careless から続いている。Furrow は a narrow trench made in the earth with a plough, esp. for the reception of seed. Poet used loosely for arable land, a piece of ploughed land, the cornfields (OED) とあり，「すじ，あぜ溝，うね間，(古・詩) 耕地」である。種まき用に掘った畝や耕地のことを言うのであるが，a half-reap'd となっているので，麦が刈られた跡のことを言っているのであろう。7行目の swath は

applied to growing grass or corn ready for mowing or reaping (OED) で，まさに刈られる草や麦としてこの個所が OED に引用されているが，普通は刈り取られた一畝とか一刈りした畑地を言う。従って furrow に swath が当てはめてもよいように思われる。しかし swath には scythe (大鎌) の意が含まれているので，thy hook と緊密に結びついている。そこで思い出すのは，第Ⅲ連における8行目の full-grown lambs の使い方と同じで，lamb は春の仔羊で，秋には full grown の sheep になっているのをさすと同じように，ここでも furrow は春の耕地，畝であり，秋には half-reap'd の swath になっているので dual-associations と見てよいと思う。a half-reap'd furrow の reap から reaper が想像され，sound asleep によって，reap と asleep の音韻によっても，reaper がぐっすりと畝に眠りこんでいる様子が出されている。Ian Jack 氏は昼の暑い時に harvester (麦刈人) が休んでいるのは，秋によくある姿で，Reaper's Repose と言われていると言っている[9]。Robin Mayhead 氏も a corn field, in which autumn appears as a slumbering reaper lying beside his half-finished furrow (麦畑で，半ば刈り終えた刈り跡のそばで寝ている麦刈人のように見える)[10] と言って，寝ている reaper を想像している。麦刈人が寝ている様子が想像されるのは，ケシからも来ていると思うが，reap'd されたもの，刈られた麦が横になって倒れている様子からも引き出されているとも思う。3行目の granary に thresher と grain を見たように，reap'd に reaper と sheaves of grain (wheat) 〈麦束〉を見てもよいと思う。半ば刈られた畝に，刈られた麦束が無造作に横になっている。そのそばで麦刈人も同じように，のどかにもぐっすりと眠っている，と見たい。次の Drows'd with the fume of poppies (ケシの香りに酔って，うとうととまどろみながら) というのは，麦畑に混って咲いているケシの花から阿片を想像し，その阿片でうとうとと眠っているので，注にも the wild English field poppy with its bright red flower was a common sight in cornfields before the use of modern weedkillers; it has very little scent, so Keats is probably thinking of the narcotic derived from the opium poppy.[11] と出ている。次の thy hook (あ

なたの鎌) は reaper が午睡を楽しむために，午前の麦刈の仕事を終えて，あとわずかな麦株と麦に絡んだケシの花とをそのまま午後の仕事として残しているのである。そして鎌が時を象徴とするなら，spare の意味は，過ぎゆく秋の日を少しでも遅らせようとして鎌を休ませながら，時を惜しんでいるともとれる。All its twined flowers の花は恐らくケシの花と思われ，細い茎が麦に絡んでいる様は，第1連の秋と太陽との sensuous な関係を思わせている。Twined (絡んだ) ということは，動きの停止が感じられる。この連の他では例えば，winnowing wind (籾殻を吹き分ける風) に，across the brook (小川を渡る) に，oozing (滲み出る) に動きが感じられるのであるが，しかしここでは真昼時の昼寝の時間ということで，休みの様子を巧みに出していて，絡んで止っている状態なのである。この第2場面では，秋が眠っている情景である。ほぼ刈り終えたあの春に種をまいた畝の上で麦刈の人がぐっすりと眠っているように，それは刈られた麦束が寝ているようであり，まるでケシの阿片の香りに酔ってうとうととしながら寝ている。まだわずかに刈り残した畝と絡んだ花はあるけれど，それも刈らずにいるのも，秋の時の過ぎゆくのを惜しんでいるからであるという風に解される。

第3情景は

And sometimes like a gleaner thou dost Keep
Steady thy laden head across a brook ; (ll. 8-9)

である。Sometimes は第2行にもあり，それぞれ第1，第2情景と，第3，第4情景とに掛っていて，この第2連を2つに分けてもいる。恐らく真昼時の昼寝までの一区切と，午後の仕事の一区切りでもあろう。しかし風景としては麦の収穫とりんご酒絞りとの2つに分けられているので，時間と収穫とにはずれがある。この第3場面において始めて like a gleaner と具体的な人物として秋は登場する。秋は落穂拾いの人となっているのだが，gleaner のイメージにはプーサンの絵 'Autumn or the Grapes of the Promised Land'[12] の中の Canephoroe (頭に籠を載せた少女) とか，旧約聖書の Ruth「ルツ記」があると言われている[13]。Ian Jack 氏が挙げているプーサンの「秋」の絵では，左側

に Canephoroe が真直ぐに立っていて，左手で頭の上に載せた荷を支え，こちら岸から広い川向うをじっと眺めているようである。この絵からすると across a brook (小川を渡る) とは違ったイメージになってしまう。旧約の「ルツ」のイメージについては，相似ている所があり，あえて同じ語(句)のある文を挙げれば，'She asked if she might glean and gather among the swaths behind the reapers' (2, l. 7) とか 'Tonight he is winnowing barley at this threshing-floor' (3, l. 3)[14] とか幾つかある。そして，キーツは，Ode to a Nightingale のⅦの ll. 6-7 で 'Through the sad heart of Ruth, sick for home, / She stood in tears amid the alien corn;' と謡っているように哀調を帯びたルツをみているのである。これら2つのイメージを恐らく背景に持っているであろう。しかしここでの gleaner は，落穂を拾い集め，重い荷を頭に載せて川を渡っていく風景にたそがれの哀感を漂わせているのである。Laden head は第1連の load を想わせ，収穫の後の更につけ加えられた収穫を表わしていて，the last oozings と同じ余情感を出している。across a brook の across の意味について，既にはっきりとしている[15]と言われても，プーサンの絵の中の女性が渡っていないように見えるので，何か引っかかるのである。しかし across について調べてみると，1)線の交叉として，Two lines run across each other (二線が交叉する)。2)長細い所 (川や道路) を一方から反対側の方へ横切る場合，I ran across the street (道を横切った)，平面 (海，原，砂漠) を横切る場合，sail across an ocean (大洋を横断して航海する)。3)越える場合，go across a river (川の向こうへ渡る)。4)位置として，live across a river (川向こうに住む)，という使い方がある。越える場合，動詞を伴って川向こうへ渡るのだが，ここでは動詞はない。しかし F. R. Leavis 氏の言うように Keep/Steady の enjambement (句またがり) の効果を考えれば[16]，荷をしっかりと保って，川をひょいと跳び越えて向こうへ渡る動作としてとってよいように思われる。Mayhead 氏の繰り返しになるが，He is visualized stepping across a small stream と言っているし[17]，Helen Vendler 女史も We also learn that the gleaner must cross a brook to get from cornfield to granary[18] とも言

っているように，麦畑から穀物倉へと小川を渡って帰っていくのである。ここで brook が出てくるのは第Ⅲ連の river sallows へのイメージの関連として風景の中に位置しているものと考えてよい。そして hook, scythe (大鎌) が秋や収穫や時の翁の持ち物として象徴されているように，river も女性や豊饒，日の出日没の場所や，時や生命などを象徴するようである[19]。小川の流れと共に一日の時が流れてきている。4つの情景のそれぞれ最後の言葉の中の wind, 視覚的に flowers の flow, brook, hours といった中に流れがあるように思われる。この第3情景はそのまま秋は落穂拾いの人として動いていくのである。落穂で一杯になった重い荷を頭に載せ，しっかりと保って，小川をひょいと跳び越えて，家路に向っていく。

第4情景は

Or by a cyder-press, with patient look,

Thou watchest the last oozings hours by hours. (ll. 10–11)

である。落穂拾いの人と共に農家の貯蔵庫のりんご絞り機のそばにくる。秋の実りであるりんごも押しつぶされて，drops of essence となってにじみ出ながら貯えられている。既に第Ⅰ連で見られた果実はここですっかりエキスとして，ブドウ酒やりんご酒に変っていくように思われる。そして雫が一つ一つ落ちている中で，秋の時がいつまでも惜しまれている。この最後の第4の情景はりんご絞り機でりんごを絞っている光景だが，絞る人は居なく，雫に目が移って，秋の女がじっとみつめているように描かれている。

以上4つの情景を通して言えることは，小川和夫氏の言うように，〈「秋」は女性の姿をとって姿を現わさねばならず，その「秋の姿」を読者は詩人とともに場面ごとに見出してゆかねばならぬ。[20]〉として，いかに読みとるかということである。字句にこだわり，この指針を見失ってしまいがちになるのだが，結局はここに立返って見ることになる。というのは，秋の女のとる姿態のうちに，農婦が現われてきて，脱穀と刈り入れと落穂拾いとりんご絞りが行われるのである。そして脱穀が済んでほっとして坐っている姿や，畝に眠っている姿や，バランスをとって川を渡る姿や，りんご絞りをして坐っている姿を見るの

である。それが「秋の女」と重っていること，秋はそうした収穫の姿の中にあるということである。そしてこの連の中でも時の流れがあること，昼前の脱穀と昼休みと，夕方の落穂拾いの人の帰宅とりんご汁のしたたりが続くのである。そして秋の持つ静謐と静かな流れがあること，穀物の中に坐っている女の髪の毛の靡く様，荷をしっかり保って川を渡る様，じっとりんご汁のしたたりを眺めている様（昼寝の時はさすがに停滞している）などである。郊外に散歩に出て見た秋の風景は農家とそこを取り巻く麦畑があり，いままさに収穫の最中であった。そして日の落ちる迄には全てが終って切株畑が広がっているのである。

註

1) 永井豊実：秋の映像―キーツの『秋に寄せて』(一)―（城西大学研究年報，No. 5, 1981）
2) Helen Vendler: *The Odes of John Keats,* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1983), p. 250.
3) Ibid., p. 244.
4) Ibid., p. 251.
5) Charlotte Carstairs: *John Keats Selected Poems* (Longman, 1983), p. 58.
6) 斉藤勇：キーツ詩選（研究社小英文学叢書，1980），p. 128
7) 永井豊実：op. cit., p. 77 で「あえて唐箕で吹く風とか箕であおる風とか言っているのではない。」としたが，情景としては籾殻を吹き分ける機械でもいいので訂正。
8) Helen Vendler: op. cit., p. 251.
9) Ian Jack: *Keat and the Mirrors of Arts,* (Oxford Up. 1967), p. 237 拙論の p. 77 でアイアン・ジャック氏としていたのをイアン・ジャック氏と訂正。
10) Robin Mayhead: *John Keats,* (Cambridge, 1967) p. 99.
11) Charlotte Carstairs: op. cit., p. 58.
12) Ian Jack: op. cit., p. 237.
13) 高橋雄四郎：キーツ研究（北星堂，S. 52）p. 359.
14) The New English Bible (Oxford Cambridge, 1970), pp. 298–301.
15) 小川和夫：キーツのオード鑑賞と分析（大修館，1980）p. 292.
16) Ibid; op. cit., p. 292 参照
17) Robin Mayhead: op. cit., p. 100.

18) Helen Vendler : op. cit., p. 244.

19) アト・ド・フリース：イメージ・シンボル事典（大修館，1984）p. 527

20) 小川和夫：op. cit., p. 292.